

《その他》

## 中華人民共和国地方都市の病院視察レポート

### — 病院環境と小児看護の状況 —

齋藤 美紀子<sup>1)</sup>

**要旨：**2013年8月に中華人民共和国（以下、中国とする）の寧夏回族自治区銀川市にある寧夏医科大学病院と寧夏人民病院を訪問した。本訪問の目的は、中国の病院環境と小児看護の現状について理解し、中国の文化および環境に即した保健医療体制についての考察を深めることであった。本訪問により中国の病院システムや看護体制などについて知見を得ることができた。中国の地方都市の中核病院は非常に規模が大きく、多くの診療科を持っていて、入院患者や外来患者の数も非常に多いことがわかった。看護師の業務は注射などの診療の補助と観察が中心であり、患者の日常生活の援助は主に家族が行っているため、多くの家族が患者に付き添っていた。小児の入院環境については、日本でみられるような小児向けの室内装飾はあまりなく、プレイルームは設置されていなかった。中国では看護師の数が日本に比べると少なく、看護援助内容も違いがあったが、今後の中国の社会構造の変化に合わせて看護援助の内容も変化していくことが考えられた。

**キーワード：**中華人民共和国, 看護体制, 小児看護, 病院環境

#### はじめに

2013年8月1日から8月3日の3日間、中華人民共和国（以下中国とする）の寧夏回族自治区銀川市にある寧夏医科大学病院と寧夏人民病院を訪問し、小児科診療と小児の病棟を中心として、様々な部門の見学をする機会を得た。その際、中国の地方中核病院の入院環境や看護体制等に関して、多くのことを知ることができた。今回の訪問を通して感じた日中間の看護の違いや文化的な特徴について、若干の考察を加えて報告する。



図1 寧夏回族自治区の位置

#### I. 銀川市と寧夏医科大学病院の概要

##### 1. 寧夏回族自治区銀川市（図1）

寧夏回族自治区は中国の西北部に位置しており、11世紀から13世紀にかけて西夏王国が繁栄した地域である。西夏王国が滅びた後、西方からイスラム教徒であ

る回族が移動してきて定住した。現在の回族は多数民族である漢民族と人種的には同じであるが、イスラム教を信仰していることが回族としてのアイデンティティとなっている。寧夏回族自治区の首府である銀川

1) 弘前学院大学看護学部

連絡先：齋藤美紀子 〒036-8231 弘前市稔町20-7

TEL：0172-31-7100, FAX：0172-31-7101, E-mail：mikisait@hirogaku-u.ac.jp

市は人口が約130万人であり、そのうち回族がおよそ10%を占めている。市の北側には黄河が流れる乾燥地帯で、日本にも飛来する黄砂のふるさとでもある。このような土地柄のため、町の中にはモスクがあり、頭が出ないようにヒジャブを着用した回族の女性も多く見かけた。しかし、日常生活において漢民族と回族は融合して過ごしており、イスラムの戒律に則った食事や礼拝などが時に見られる程度の印象を受けた。また、銀川市内には非常に病院が多いと感じた。実際、銀川は病院の町と言われているという。寧夏回族自治区で唯一の医科大学が存在する都市として、たくさんの医療機関や施設が集中していることが伺えた。

## 2. 寧夏医科大学病院

寧夏医科大学病院(中国語では宁夏医科大学总医院)は、1935年に寧夏省立病院として創立された。寧夏医科大学の附属病院であり、教育病院として大きな役割を果たしている。病院分類としては最高レベルの三級甲等病院で、周辺地域1300万人の人口をカバーする寧夏回族自治区の中心的な医療機関である。常勤の職員数4200人あまり、そのうち医療専門職が3800人あまりである。病院の敷地は広大で、本院の他、心脳血管病院と腫瘍病院、外来部門などがある。本院のベッド数は2186床であり、年間の患者数は、外来受診者100万人、入院患者7万人、手術件数4万件である。47の診療科、13の検査科があり、国の重点研究プロジェクトとして、循環器内科、救急医学、神経外科、心血管外科などが指定されている(寧夏医科大学总医院, 2014)。病床数が2000床を超えるというのは日本にはない規模の病院である。しかし、中国の中核病院では普通に見られる規模ということで、つくづく中国の人口と国土の規模の大きさを実感した(写真1)。

本院の看護師数は1217人であり、そのうち病棟勤務が868人、男性看護師は47名である。看護師の学歴は、大学(本科)卒が456人(37.5%)、短大(専科)卒が721人(59.2%)、中等専門学校卒が21人(1.7%)である。また、年齢構成としては、30歳以下が531人(43.6%)、31~40歳が415人(34.1%)、41~50歳が231人(18.9%)である。管理体制は、院長、副院長、看護部主任(日本の看護部長にあたる)、副主任、いくつかの病棟を統括する科師長、病棟師長という系列となっている(寧夏医科大学总医院, 2014)。中国では、看護師の免許とは別に称号の制度があり、護士から始まって、護師、主管護師、副主任護師、主任護師の5段階で、師長、



写真1 寧夏医科大学病院(外科系入院病棟のビルディング)

看護部主任などの管理職へのステップアップに上級の称号の取得が条件となっている(児玉, 2011)。なお、大学本科生は卒業とともに護師の資格を得ることができる(岸他, 1998)。主任になるには博士の学位を持っていることが必要である。今回の病院見学の便宜を図ってくれた看護部主任の芦鴻雁さんは40代であり、日本の大学で博士号を取得した方であった。副主任以上の看護管理者は比較的若く、海外の留学経験を持つ人も多かった。

なお、寧夏医科大学病院の設置主体である寧夏医科大学は、1958年に設立された寧夏回族自治区でただ1つの医科大学であり、臨床医学、基礎医学、看護学、公衆衛生、中医学、薬理学など11の学部と4つの教育部門を持つ総合医科大学で、学生数は26000人である。2002年に看護学校が大学に統合され、看護学部(中国語で护理学院)となった(寧夏医科大学, 2014)。看護学部は2000年に5年制の学部学生(本科生)の募集を始め、2002年には4年制となった。看護学部の在校生は2600人であり、学生は寧夏医科大学病院で看護実習を行っている(寧夏医科大学护理学院, 2014)。

## II. 施設見学

### 1. 寧夏医科大学病院

寧夏医科大学病院では2日間にわたって2つの小児科病棟、NICU、消化器外科病棟、脳神経外科病棟、ICUを見学した。小児科病棟の見学は、中国の子どもたちがどのような療養環境で過ごしているのか、看護師はどのような実際にどのような援助を行っているのかを把握することを目的として行った。

### 1) 小児科病棟

小児科の病棟はどちらも内科系であり、腎疾患、自己免疫疾患を中心とした慢性期の小児が多い病棟と、呼吸器感染症を中心とした急性期の病棟であった。1つの病棟の病床数は60床ほどで、病室は6人部屋、2人部屋、個室があり、広さは一般的な日本の病棟とほぼ同様であった。病室にはカーテンはなく、すべて見渡せる状態になっていた。また、天井から蚊帳が吊ってあるのが印象的であった(写真2)。

患児の年齢構成は幼児期が多く、男女とも青いディスプレイキャラクター柄の病衣を身につけていた。また、すべての患児に母親が付き添っていた。日本でも乳幼児の入院では親が付き添うことが多いため、この点ではあまり違いを感じなかった。しかし、ベッド回りはかなり違って感じるように感じた。日本の場合、短期の入院であってもほとんどの場合おもちゃやゲーム、絵本等を持ち込んでおり、ベッド回りには比較的多い印象がある。今回見学した病院では、ベッド回りは整然としており、テレビはなく、おもちゃなどもあまり置かれていないようであった。病棟にはプレイルームがなく、遊びが盛んな時期の小児が入院中にあまり遊ばなくてストレスを感じていないかと尋ねたところ、確かに回復期になると退屈してくるので、親と一緒に病棟の中を散歩するなどして気分転換を図っているとのことであった。病棟で会った子どもたちは概して行儀がよく、静かに過ごしているのが印象的であった。また、腎炎の子どもたちの病院食について質問したが、患者の状態に合わせた細やかな治療食の対応はされていないとのことであった。

小児科病棟では、幼児期の患児も高柵ではない普通のベッドを使用していた。サイドレールも低いので、転落の危険はないのかと尋ねたところ、母親が常に付き添っていて、夜間は一緒に寝るのでベッドからの転落はないとのことであった。今回は2つの病院で3つの小児科病棟を見学したが、高柵ベッドは使用されておらず、中国では小児用の高柵ベッドは一般的でないのかもしれないと感じた。

小児の入院患者の治療・処置について興味深かったのは、幼児前期頃の子どもの点滴が頭皮静脈から実施されていることであった。頭部に鉢巻きのようなものを巻いているのを見て、冷罨法を行っているのかと思ったが、頭皮静脈に針を留置していて、点滴をしていない時にはバンドで巻いて固定しているのだとい



写真2 寧夏医科大学病院小児科病棟の様子



写真3 小児科病棟(呼吸器疾患)で実習している看護学生と

う。現在、日本ではこの部位からの点滴はほとんど実施されないが、中国では小児の看護技術として一般的であるという。ただし、全部が頭皮静脈からの実施というわけではなく、中学生の急性腎盂腎炎の患児や、先天性心疾患の3か月頃の乳児は手背に血管確保され、刺入部の観察がしやすいように透明のドレッシング材が用いられていた。

小児科の病棟では、実習中の寧夏医科大学の専科(短大)の看護学生と少し話をする事ができた。病院実習での指導には大学の教員が常駐しておらず、病棟の臨床指導者から指導を受けているとのことであった。中国では看護師免許取得前でも実習中に点滴や注射を実施しているということで、日本との違いを感じた(写真3)。

### 2) 新生児・小児集中治療室(NICU・PICU)

NICU、PICUは、2005年に開設された小児救急セン



ターの1つの部門である。設備は最先端であり、中央にナースステーションがあり、壁面をとりまくようにインファントウォーマーや保育器が並んでいた。ベッド数は38床、医師が14名、看護師は修士の学位を持つ者4名を含め、高度に訓練された看護師が78名配置されている。入院患児の疾患では新生児呼吸窮迫症候群が多いとのことであった。今回は年長児の入院は見かけず、すべて新生児から乳児期の小児であった。また、NICUでは母子分離に対する看護援助を重視していて、面会が少ない親に対しては母子関係形成のために積極的な介入を行っているとのことであった。NICUスタッフのチームワークの良さが伝わってくる雰囲気があり、みな勉強熱心で、新生児医療に力を入れていることがよく理解できた。中国の新生児死亡率は17(出生1000人あたり)であり、日本や欧米諸国の3前後に比較すると高い数字である(中国衛生部, 2011)。中国は人口が多い国ではあるが、政策により出生する子どもの数は制限されていることから、小児期の死亡率を減少させることが課題の1つになっていることが伺えた(写真4)。

### 3) 集中治療室(ICU), 外科系病棟

寧夏医科大学病院のICUは、説明によると中国で3本の指に入る高機能なユニットであり、寧夏医科大学病院の特色の1つとなっている。病棟の壁は曲線を描いていて直線部分がないため、部屋の奥までよく見渡せるようになっていた。病床数は50床ほどであり、患者の重症度によってさらにいくつかのユニットが形成されていた。部屋の中央にナースステーションがあり、ベッドは壁に向かって配置されていて、すべてのベッドサイドに人工呼吸器とモニター類一式が準備されていた。ベッドサイドの壁の下方には30cm四方ほどの扉がついていて、ここを通して患者に使用した機器類を直接ICUの外の通路に出すことができるようになっていた。これは感染予防策の1つであると説明を受けた。

外科病棟は2か所見学した。1つは消化器外科、もう一つは脳神経外科である。どちらも病棟の中は患者の家族や親族で混み合っていた。消化器外科では胆肝系の疾患が多く、病棟には患者の食事に関する掲示物が多く見られ、疾患別にどのような食材を提供すればいいのかなどが記されていた。中国では食事は入院料とは別であり、食事や身の回りの世話は家族の仕事であるため、家族への情報提供がこのような形で行われ



写真4 寧夏医科大学病院 NICU

ていた。脳神経外科では脳卒中の患者が多いとのことであった。脳神経外科病棟の一角にある重症病室の前に多くの人だかりがあったため、何が起きているのかを質問したところ、回族の重症患者が入院していて、親族が回復を願って祈祷師を呼んだとのことであった。

寧夏回族自治区の病院は銀川に集中しているため、周辺の農村部の住民たちは何時間もかけてやってくる。開業医は一般的でなく、外来は医科大学病院など大病院での受診を希望する患者が多いという。入院となれば、親や身内を大切にする中国の人たちはみな病院に駆けつける。前述のように遠くからやってくるので、病院に寝泊まりすることも多い。面会時間になるまで、家族は廊下やロビーで過ごしているが、皆立ったままか、床に座り込んでいた。家族のために椅子やベンチを用意することはないのかと尋ねたところ、あまりに人が多く、とても対応できないのでむしろ何も置かないのとのことであった。

### 4) 寧夏人民病院の見学

訪問3日目には、同じく銀川市にある寧夏人民病院の見学を行った(写真5)。寧夏人民病院は1971年に設立され、西安にある第四軍医大学と、寧夏医科大学の教育病院であり、総合医のための研修病院でもある。総ベッド数は2630、約2300人の医療専門家が従事している。年間120万人が外来受診し、3万2000人の手術、5万6000人の入院がある三級甲等病院であり、寧夏回族自治区の地域拠点病院と言える病院である。31の診療科を持つ外来には、毎日およそ6000人の患者が訪れるとのことであった(寧夏人民病院, 2014)。2011年11月に完成したばかりの新しい病院のエントランスロ



写真5 寧夏人民病院



写真7 消化器外科病棟のナースステーション



写真6 寧夏人民病院小児科外来 輸液室の壁面装飾

ビーは広々として開放的であった。ここでは、看護部主任と教育担当の副主任が案内をしてくれた。副主任は30代前半であり、日本で修士を取得した人で、2年前に中国に戻ってきたばかりとのことであった。

寧夏人民病院では小児科外来、小児科病棟、薬剤部を見学することができた。小児科外来は救急部門の一角にあり、気管支炎や肺炎などの呼吸器感染症が多い一般的な急性期の外来である。点滴を受ける患児が多いことから、輸液室が隣接しており、点滴スタンドがついた椅子が50あまり並んでいて、患児はこの椅子に座って点滴を受けるということであった(写真6)。小児科病棟は、寧夏医科大学病院の小児科病棟より個室が多く、家族面談用のファミリールームが備わっていた。また、病室のドアにキャラクターや子ども向けの絵が貼ってあり、ユニフォームも動物柄のものを着用しており、少し柔らかな雰囲気を作り出していた。こちらも家族や親族が病棟内にたくさんおり、ロビー

にも多くの人がいた。

#### 5) 印象的だった病院環境

寧夏医科大学病院では、ナースステーションの壁面に漢詩のような文章が掲げられていた。これは何かと質問したところ、病棟のモットーのようなもので、故事成語の一部などを引用しているとのことであった。消化器外科病棟では、「肝胆相照 和谐共存」(肝臓と胆のうのようによく理解しあって調和し共存する)と掲げられ、脳神経外科では「腦悠拥有智慧 我们尽善尽恙」(脳には智慧があり、私たちはできるだけ病人に尽くす)とあり、いかにも中国らしいと感じた(写真7)。また、病棟の中には至る所に看護師の心得が掲示されているのも興味深かった。また、優秀な看護師の表彰なども掲示されており、患者サービス向上に対する取り組みの熱心さが感じられた。さらに、ICUを取り巻く回廊式の通路には、赤い布に黄色の文字で刺繍された旗がたくさん飾られており、退院した患者がスタッフへの感謝を込めて送ったものだとのことであった。写真8にあるのは、「徳高く心温かい医術は広く伝わるだろう」といった意味の感謝の言葉だという。

寧夏人民病院は完成年度が新しく、院内にいくつかのアメニティに関する設備を持っていた。地下のカフェテラスや、美容院、それと日本のコンビニのような売店があった。売店には見舞客用に見舞いの品が置いてあったが、その中で面白かったのが、烏骨鶏の卵の盛り籠である。たくさんの卵がきれいに並べられていた。卵は栄養価が高いのと、烏骨鶏は薬効があると考えられていることから、見舞いの品として人気があるのだという。





写真8 ICUの廊下に飾ってある患者からの感謝の旗

また、病院では少数民族の宗教に対する配慮がなされていることも特徴である。寧夏医科大学病院は回族が多く住む地域にある。回族はイスラム教徒であり、様々な戒律を持っているため、それに合わせた配慮が見られた。1日に数回礼拝を行うことから、寧夏人民病院では各病棟に1畳ほどの広さの礼拝室があり、患者の家族がここで礼拝ができるようになっていた。食事では豚を食べず、食材も一緒に扱わないので、スタッフ休憩室の流しや電子レンジなどは回族の職員用に専用のものが準備されていた。イスラム教には断食月があるが、入院患者でもそれは守られるのかと尋ねたところ、さすがに病人はそこまでなくていいとのことであった。

筆者が訪問した時には、ちょうど看護師の新採用者のための研修が行われていた。会議室前には席次を記した大きなボードが掲げてあり、上座の席から順番に番号が振られていて、階級によってどこに座るかが一目瞭然になっており、中国の社会体制を実感した。新採用者研修に関して、寧夏医科大学病院では大学卒の看護師の割合は全国よりかなり高く、高等教育を受けた看護師を積極的に受け入れ、看護の質の向上を図っていると看護部主任が説明してくれた。中国では政策として看護師の高等教育化を推し進めており、地方都市においても看護師の専門的なキャリアアップが図られつつあることがわかる。しかし、研修中の新人の態

度について「最近の若い人はなっていない」と管理職の人たちが話すのを聞いて、どこの国でも若い世代に対しては同じような印象を持つのだろうと感じた。

### Ⅲ. 中国の地方病院における小児科の入院環境と看護について

今回の訪問の主目的は、中国の病院での小児看護の状況を知ることであった。その中で、特に入院環境について知ることができた。中国では大都市と地方の社会的な格差が大きく、また他地域の施設を見ていないために、今回の見学で把握した入院環境が中国の代表例であると言い切ることはできない。しかし、見学した2つの病院は、両者とも高度な医療を提供する三級甲等病院に位置づけられる病院であり、中国におけるこの等級の病院の状況がある程度反映していると考えることができる。

見学した小児科病棟の環境については、小児を意識したものは少なく、全般的にシンプルな印象を受けた。日本では、見知らぬ場所や人に恐怖を抱きやすい小児に対して、一般に小児科病棟では少しでも安心できる環境づくりがされていることが多い。柔らかい色調の壁紙や、キャラクター化された動物などの絵を飾り、プレイルームが設けられている病棟も多い。また、看護師はカラフルなエプロンやユニフォームを身につけるなどの工夫も行っていることも多い。日本においては、小児の入院環境に対する意識はこの20年ほどで大きく向上しており、小児にとって欠くことのできない遊びや学習の援助や心理面の支援など、他職種連携も進んでいる。寧夏医科大学病院の病棟環境は特に小児向けの色調や装飾は感じられず、看護師のユニフォームはシンプルなものであった。もう一方の寧夏人民病院では、看護師は動物の模様がついたユニフォームを着用しており、病室の入口や小児科外来の点滴室のドアにはキャラクターの絵が貼ってあるなど、少しずつ子ども向けの環境を作っている様子が窺えた。しかし、どちらの病院もプレイルームはなく、学習支援を行う教師や、遊びの援助を行う保育士は配属されていなかった。これは、疾患の特徴が急性期中心で短期の入院であることも一因であろう。また、病院は疾患の治療の場であり、療養生活における小児の心理社会的支援はあまり重視されていないのかもしれない。

病棟において、看護師はベッドサイドで小児と遊んだり、清潔や排泄の援助を行ったりすることはほとんど

どなく、点滴注射の実施と状態の観察がメインの業務のようであった。辻村ら（2009）の調査によると、日本人看護師が感じた日本と差異がある看護技術として、日常生活の援助を家族が行うことを報告している。また、中国では日々の業務の中で注射や与薬などが占める割合が大きく、一方日本では清拭、移動、排泄介助、食事援助など、身の回りの援助が看護師の主たる業務で、看護師に期待されている役割が中国とは大きく異なっていると述べている。中国では患者の世話を家族がするという慣例があり（Smith and Tang, 2004）、これが小児科における小児への看護援助の違いにも反映されていると考えられる。しかしながら、少子高齢化に伴って、今後中国の看護がそのような状況を維持していくとは考えにくく、将来的に看護師の援助内容はよりトータルなものになっていくだろうと思われる。

今回、看護師の小児の看護をする上でどのような点が難しいかと尋ねたところ、母親との関係性であるという答えが返ってきた。小児看護では親子を1つの単位としてとらえて看護を行うことが基本であり、親も含めた看護援助を行う必要がある。そのためには親との関係形成が大変重要であることは広く認識されている。中国では長年にわたって「一人っ子政策」が行われており、子どもを大切に作る気持ちから過保護的な対応が問題になっていることも散見される。病棟師長は親からの要求が多く対応が大変だと述べていたが、日本においても子どもに付き添っている家族に十分対応できているとは言えず、親の気持ちは中国も日本もそれほど変わるものではないことが推察された。近年ファミリールームを設置する病院が日本でも増えているが、ファミリールームを備えた寧夏人民病院では、家族に対する援助にも目を向け始めていることが伺えた。

## おわりに

今回の見学で、中国の地方中核病院の規模は大変大きく、外見上も設備も非常に立派なものであることを実感した。最先端の機器や充実した設備を備えており、高度な医療サービスが提供できる環境にあることが分かった。その一方、医療が高度化していく速度に看護の体制がまだ完全には追いついていないことも伺えた。しかしながら、訪問で出会った看護師はみな熱心

で誠実さや勤勉さが感じられ、日本の看護師ととても似通った印象を受けた。看護師としてのメンタリティには国が違っても非常に通じるものがあった。今回の訪問を通して、看護とは国や地域による文化的な差異を含みながらも、その理念は普遍的なものであることを痛感した。

## 謝 辞

訪問に際し、現地で通訳を下さった弘前学院大学看護学部の周馨麗先生と、見学を快く受け入れて下さった寧夏医科大学病院の皆様感謝いたします。

## 引用文献

- 1) 中国衛生部（2011）：中国衛生統計年鑑、  
<http://www.moh.gov.cn/htmlfiles/zwgkzt/ptjnj/year2011/index2011.html>（2014.1.10アクセス）
- 2) 岸英子, 孫莉, 劉瑞霜（1998）：変革期の中国の看護の現状と課題, 長崎大学医療技術短期大学部紀要, 12, 127-133
- 3) 児玉有子（2011）：中国における看護の発展－ベッドサイドの看護師にも求められる専門誌への論文投稿, MRIC by 医療ガバナンス学会メールマガジン, 155, <http://medg.jp/mt/2011/05/vol155.html>（2014.1.10アクセス）
- 4) 寧夏医科大学（2014）：学校簡介 <http://www.nxmu.edu.cn/>（2014.1.10アクセス）
- 5) 寧夏医科大学护理学院（2014）：学院概況 <http://hlxy.nxmu.edu.cn/>（2014.1.10アクセス）
- 6) 寧夏医科大学总医院（2014）：医院概況 <http://www.nyfy.com.cn/>（2014.1.10アクセス）
- 7) 寧夏人民病院（2014）：医院概況 <http://www.nxrmyy.com/>（2014.1.10アクセス）
- 8) 作田裕美, 坂口桃子（2013）：日中看護交流から見えてきたもの, 大阪市立大学看護学雑誌, 9, 69-72
- 9) Smith, D. R., Tang, S. (2004) : Nursing in China: Historical development, current issues and future challenges, 大分看護科学研究, 5 (2), 16-20
- 10) 辻村裕美, 森淑江, 高田恵子, 宮越幸代（2009）：日本と途上国の看護技術の差異（中国）－中国で活動した青年海外協力隊員への面接と報告書の分析－, The KITAKANOTO medical journal 59 (1), 51-58

## 参考文献

- 1) 豊島由樹子, 仲村秀子（2007）：中国の病院の現状および看護体制について－第三軍医大学西南病院・新橋病院を訪問して－, 聖隷クリストファー大学看護学部

- 紀要, 15, 61-68
- 2) 潘娜 (2010): 中国の近代史における看護教育の歩み, 山梨大学看護学会誌, 9 (1), 9-13
- 3) Xu Y., et al. (2000) : The nursing education system in the People's Republic of China: evolution, structure and reform, International Nursing Review, 47, 207-217

## REPORT ON A VISIT TO LOCAL CITY HOSPITALS IN THE PEOPLE'S REPUBLIC OF CHINA -HOSPITAL ENVIRONMENT AND CHILD NURSING SITUATION-

Mikiko SAITO<sup>1)</sup>

**Abstract:** The author visited Ningxia Medical University Hospital and Ningxia People's Hospital located in Yinchuan, Ningxia Huizu Autonomous Region in the People's Republic of China (herein referred to as China) in August, 2013. The purpose of this visit was to understand the current situation of child nursing and hospital environments in China in order to consider a health care system based on Chinese culture and social environment. The author obtained knowledge about the Chinese hospital and nursing system through this visit. The core hospital of the local city in China was quite large, having many clinical departments, and there were large numbers of inpatients and outpatients. It seems that nurses mainly assisted in medical treatments, such as injections, and observed or assessed patient condition. Daily life care of the patient, such as meal preparation, disposal of waste, and changing of clothes, is commonly provided by family members in China. Therefore, many family members stay at a patient's bedside all day long. There were few child-friendly interior decorations in pediatric wards when compared with Japan. Play rooms for hospitalized children were also not set up in the ward where I visited. While there were some differences in nursing practice and hospital environment between China and Japan, it seems that the attitude and basic characteristics of nurses are the same in both countries.

**Key words :** The People's Republic of China, nursing situation, child nursing, hospital environment

---

1) Faculty of Nursing, Hirosaki Gakuin University  
TEL : 0172-31-7100, FAX : 0172-31-7101, E-mail : mikisait@hirogaku-u.ac.jp